

テーマ：「奉仕の理想」とは

大和高田 RC 杉田 博

ロータリーの友 2007 年 12 月号によると、207 カ国、クラブ数 32,943、会員数 1,224,168 人(2007 年 6 月 30 日公式発表、平均 37.2 人/クラブ)に達しています。インド、東アジアの会員数が増加し、アメリカ・日本は減少、ヨーロッパは微増という趨勢である。日本は現在アメリカに次いで会員数、クラブ数とも世界で第 2 位のです。クラブ数 2,319 会員数 98,149 人(2007 年 9 月末現在、平均 42.32 人/クラブ)、2650 地区昨年度期首会員数 5,204 人、期末は 5,103 人(▲101 人)ということでした。2650 地区の平均は 53.2 人/クラブであります。

日本では 34 地区が 4 ゾーン (全世界では 34 ゾーン) に分れていますが 1 ゾーンの北海道、東北、新潟、北関東 3 県と千葉県で 12 地区の会員数 26,377 人の減少が多いのが特徴で、2 人の RI 理事割り当てがありますがこの人数も減りかねない恐れがあるといわれています。

さて、2007 年の「今年の漢字※」(12 月 12 日=いい字一字)は「偽」でありました。

1. 食品に偽:食肉、野菜、菓子、ファーストフードまで、産地や素材、賞味期限に多くの「偽」。
2. 政治も偽:年金記録、政治活動費、米艦への給油量にも「偽」が発覚し、国会答弁も「偽」。
3. 老舗にも偽:伝統ある土産品にも、名門の老舗料亭にも「偽」。
<思わず「ああ、お前もか!」さらに・・・>
4. 耐震強度偽装、人材派遣会社の偽装請負事件、英会話学校の偽装など多くの業界に偽りが見つかったほか、相撲やボクシングなどスポーツ選手にも偽りが発覚。中国には有名キャラクター模倣の「偽」遊園地が堂々開園していたことも、理由に挙げられました。他人事ではありません。

私たちは、今こそロータリーの原点、ロータリーの心を勉強し直す時であると、強く感じます。

今日は、ロータリアンが好んで口にする言葉のひとつに「奉仕の理想」についてお話しさせていただきます。よく使うのだが意味がよく解らない言葉と思います。

英語では”Ideal of Service”となっていますが、日本のロータリーの創始者、米山梅吉氏がこれを「奉仕の理想」と翻訳し、そのまま今日に至っています。

“Ideal of Service”(奉仕の理想)は現代語で翻訳すれば、「奉仕理念」ということになります。

ロータリーの綱領(目的)や重要なロータリーの文献にもこの「奉仕の理想

(理念)」が頻繁に使用されており、日本では同名のロータリー・ソングとしてもお馴染みの言葉となっています。

しかし、ロータリーの公式文献にはこれをはっきりと定義した文章はありませんが、これをいかに適用するかを示した唯一のドキュメントが決議 23-34 です。

決議 23-34 には「ロータリーとは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕―超我の奉仕”Service above Self”の哲学であり、最もよく奉仕する者、最も多く報いられる “He profits most who serves best” という実践倫理に基づくものである」と具体的な補足説明がなされており、ロータリーの奉仕理念は、ロータリーの二つのモットーに示されたものと思われま。

国際ロータリーの組織化に貢献した、チェスレー・ペリーは「奉仕の理想 (理念)」について、個人的な見解として、唯一、Ideal of Service について記述しているものがあります。

それは毎年発刊されます-Official Directory-。これは全世界のロータリー・クラブの所在・連絡先が記載された会員 (クラブ) 名簿ですが、その背表紙の裏にこの様に英文で書かれているのみであります。

“Rotary clubs everywhere have one basic ideal the “Ideal of Service”, which is thoughtfulness of and helpfulness to others.”

「何処においてもロータリー・クラブにも、一つの基本となる理念を大切にしている、それは他人を思いやり、そして他人のために尽くすことである」と説明しています。

イギリスのビビアン・カーター著の”The meaning of Rotary”には、「奉仕の理想 (理念)」は、人間の思考と同じくらい古いものである。たとえ、宗教と哲学との差があったとしても、隣人に対して己を捧げることが道徳上の義務であり、人生のすべての部門でそれを適用することを説いたものであることには間違いない。」として、その代表的な表現方法として「黄金律^{*}」を挙げています。

ポール・ハリスは”This Rotarian Age”の中で、ビビアン・カーターの言葉を引用し、さらに、決して金銭に捉われてはならない職業として、法曹家、医師、宗教家などの専門職務の例をあげると共に、その職業態度がビジネスマンにも必要だとして「奉仕の理想 (理念)」とは、ものの過程の最初に奉仕を置くものである。奉仕の理想 (理念) を標榜する者は受けるべき物質に於いてではなく、まず与えるべき奉仕に着眼すべきである。物質を眼前に置けば見通しは困難と

なる。そしてその最も愚かな方法は金銭に集中することである。」と説明しています。

「子供は砂山作りに熱中する。しかしそれは、砂に希少価値があるからではなく、ほかの子供の砂山より、自分の砂山の方をより高く作りたいからである。子供は砂を積み、大人は黄金を積み上げるが、両者の動機に大差はない。」

「持っていることは、持たざる人の羨望（せんぼう）と嫉（ねた）みをより大きくするだけである。この二つのケースでは、少なくとも一つの点で、子供の方が聡明といえよう。砂を貯めても不愉快な影響は残らないが、黄金の蓄積には、ミダス王*が晩年になって悲しみを悟ったような、不愉快さが残る。慾深い行為は奉仕の理想とは両立しない。」 (This Rotarian Age)

もう一つ、確認しておかねばならないのが、” Object of Rotary” ロータリーの綱領といわれていますが、むしろロータリーの目的と言ったほうが適切です。その前段に、ロータリーには有益な事業(企業活動)の基礎として奉仕の理想(理念)を鼓吹(奨励)し育成する、と目的が明記されています。

即ち、ロータリーの唯一の目的は「有益な事業、職業」の基礎に” Ideal of Service” 「奉仕の理想(理念)」(サービスの心・理念)を据える、と言うことでもあります。また、このことは「自分の職業の倫理性を高めそれを通じて広く世の中に貢献する」と言うことでもあります。

奉仕哲学である”Service above Self” 「超我の奉仕」と実践倫理の "He profits most who serves best." 「最も良く奉仕する者最も多く報いられる。」は”Ideal of Service”のエッセンスであります。(認証状のロータリーエンブレムの両サイドにきちんと記載されております。)

ロータリーは基本的には寄付団体でも、慈善団体でもありません。また、特定の事業を標榜するボランティア団体でもありません。

奉仕(サービス)を志す人の集まりであります。現代の矛盾に満ちた社会で、自然を破壊することは、人間も自然の一部であるから人間自身も破壊することになります。ロータリーはシェルドンが提唱したように、物と心を対立させるのではなくて、「物と心の相関と調和」を説いてきました。

如何に世の中が変わろうとも、ロータリアンがロータリー運動の真の目的――例会での親睦を大切にして奉仕の心の涵養――を忘れず、日常万般の行動する限り、ロータリー運動は不滅であると信じます。米山梅吉翁は「ロータリーの例会は人生の道場」と言われました。ロータリーは人づくりの修練の場と言えるのではないかと思います。

“Enter to learn, go forth to serve.”(入りて学び、出でて奉仕せよ)

(参考)

「今年の漢字」「漢字の日」(12月12日=いい字一字)の年中行事

-
- 1995年：震(阪神・淡路大震災や、オウム真理教事件、金融機関などの崩壊などに“震えた”年)
- 1996年：食(O-157食中毒事件や狂牛病の発生、税金と福祉を「食いもの」にした汚職事件の多発)
- 1997年：倒(山一証券など大型倒産の続出や、サッカー日本代表が並いる強豪を倒してワールドカップ初出場決定)
- 1998年：毒(和歌山のカレー毒物混入事件や、ダイオキシンや環境ホルモンなどが社会問題に)
- 1999年：末(世紀末、1000年代の末。東海村の臨界事故や警察の不祥事など信じられない事件が続出して、「世も末」と実感。来年には「末広がり」を期待)
- 2000年：金(シドニーオリンピックでの金メダル。南北朝鮮統一に向けた“金・金”首脳会談の実現。新500円硬貨、二千円札の登場など)
- 2001年：戦(米国同時多発テロ事件で世界情勢が一変して、対テロ戦争、炭そ菌との戦い、世界的な不況との戦いなど)
- 2002年：帰(北朝鮮に拉致(らち)された方の帰国、日本経済がバブル以前の水準に戻ったこと、昔の歌や童謡のリバイバル大ヒットなど「原点回帰」の年)
- 2003年：虎(阪神タイガースの18年ぶりのリーグ優勝、衆議院選挙へのマニフェスト初導入で政治家たちが声高に吠(ほ)えたこと、「虎の尾をふむ」ようなイラク派遣問題など)
- 2004年：災(台風、地震、豪雨、猛暑などの相次ぐ天災。イラクでの人質殺害や子供の殺人事件、美浜原発の蒸気噴出事故、自動車のリコール隠しなど、目を覆うような人災が多発。「災い転じて福となす」との思いも込めて)
- 2005年：愛(紀宮様のご成婚、「愛・地球博」の開催、各界で「アイちゃん」の愛称の女性が大活躍。残忍な少年犯罪など愛の足りない事件が多発したこと。「愛」の必要性和「愛」欠乏を実感した年)
- 2006年：命(悠仁様のご誕生に日本中が祝福ムードに包まれた一方、いじめによる子どもの自殺、虐待、飲酒運転事故など、痛ましい事件が多発。ひとつしかない命の重み、大切さを痛感した年)
-

黄金律(Golden rule) 出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』 (2007/05/12 15:58)

黄金律 (おうごんりつ) は、多くの宗教、道徳や哲学で見出される「他人にしてもらいたいと思うような行為をせよ」という内容の倫理的言明である。現代の欧米において「黄金律」という時、一般にイエス・キリストの「為せ」という能動的なルールを指す。

- イエス・キリスト:「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」(マタイによる福音書7章12節)
- 孔子:「己の欲せざるところ、他に施すことなかれ」(論語 卷第八衛霊公第十五 二十四)
- ユダヤ教「あなたにとって好ましくないことをあなたの隣人に対してするな。」(ラビ・ヒルレルの言葉)
- ヒンズー教「人が他人からしてもらいたくないと思ういかなることも他人にしてはいけない」(『マハーバーラタ』5:15:17)
- イスラム教「自分が人から危害を受けたくなければ、誰にも危害を加えないことである。」(ムハンマドの遺言)

ミダス王(Midas) 出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

ギリシア神話の中で**ミダス** (**ギリシア語**: Μίδας、しばしば**ミダス王**と呼ばれる)は、触ったものを全てを黄金に変える能力 ("Midas touch") のため広く知られている。

ミダスは**フリギア** (Phrygia) の都市**ペシヌス** (Pessinus) の王^[1]で、子供の頃に**ゴルディアス** (Gordias) と彼を夫とする女神**キュベレ** (Cybele) の養子となった。ミダスは、**快樂主義者**、そして優れたバラの庭師^[2]として知られていた。また、『**イリアス**』(v.860)によると、彼には残忍に人を殺した**リデュエルセス** (Lityerses) という一人の息子がいた。しかし、神話の中には、代わりに**ゾエ** (Zoë) 「生命」という娘がいたとするものもある。神託の命令に従って人々に迎え入れられ、王とされた貧しい農夫**ゴルディアス** (Gordias) の神話については、**en:Gordias** を参照。

《イソップ寓話》(例)

ふれると何でも金になるお話

業突く張りの王様は願い事を言いなさいと言われて「触れるものは何でも金になるようにして下さい」と頼みます。その願いが聞きいれられ、触れるものは何でも金になりましたが、その願いは大変な事であったのです。

王様は娘に触ったとたん娘は金に変わってしまいました。食べ物を食べようとするとき食べ物も金に変わってしまい、せめて水でもと思いましたが、喉に入ってから水は金に変わり窒息してしまうと思い、触るものが何でも金になる願いを取り消して欲しいと嘆願するお話です。

このお話はミダス王のお話なのですが、ミダス王は太陽神アポロンが太陽を牽いているしか能がなく、黄金の光を振り撒く浪費家だ。と悪口を言ったのが事の始まりでした。その悪口を聞いたアポロンは「では何でも望む事を言いなさい。そうなるようにしてあげよう」と言うのですね。ミダス王に自分の力はそれだけでは無いという事と、神を侮辱するとどうなるか思い知らせるために「望みをかなえるふり」をしたわけです。